

EFL環境における英語教室内インタラクションの意義と可能性

Meaning and possibilities of English classroom interaction in EFL context

渡邊 万里子

Mariko Watanabe

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード : 児童英語教育, 教室内インタラクション, ナチュラル・ディスコース

Key words : English education for Japanese children, Classroom interaction, Natural discourse

1. 研究目的と背景

外国語学習において、学習者はその目標言語の背景にある異文化に触れることでアイデンティティの拡大すなわち人間的成長を経験する可能性を持つ。本研究では、英語教育には言語知識の習得とは異なる次元の資質・能力を育む意義と可能性があることを示す。

Jackson (2014) は、言葉や異文化間コミュニケーションを学ぶことは人間的成長をもたらす得ると述べている。外国語学習者が異なる文化やそれを持つ人々と関わって自己との違いに触れることは、自分がそれまで慣れ親しんできた文化について考えたり、気づかなかつた側面を認識したりするきっかけを与える。そして自文化と異文化の両方の価値観と文化規範、またコミュニケーションのしかたなどに関する気づきが得られると、学習者の考え方や行動のレパートリーが増大する。それがアイデンティティの拡大であり、人間的成長と捉えられるものである。Jackson はさらに、文化はしばしば国家と結びつけて考えられるが、それだけでは国家という大きな集団内の多様性はまったく考慮されないと批判し、文化 (culture) を “A community or group that shares a common history, traditions, norms, and imaginings in a particular cultural space (e.g. a neighbourhood, region, virtual space)” (p.362) と定義しており、ゆえに異文化間コミュニケーションとは、外国や外国人のみならず、学習者が関わる同国民を含むあらゆるコンテキストにおける人々同士が関係を築くことでもあると考えられる。この考え方は人間教育としての英語教育を考える上で重要であろう。なぜなら、我々はそれぞれ異なる文化を持つ個であり、生きていく上で他者と関わることは避けられないから

だ。相互理解を重ねて安定した関係を築く力を身につける必要は、すべての人にある。

言語習得とは別の外国語学習の側面に着目する Kramersch (1985) は、学習には二重のコンテキストが存在すると説明している。学習者が言語知識そのものを学ぶ external context では、instructional discourse が起こる。教師は学習者に言語知識を与え、学習者は教師の指示に従って学習活動をする一般的な教室談話はこれにあてはまる。教師—学習者間のインタラクションがいかにかに学習者の言語習得を促してきたかは、これまで数多くの研究によって明らかにされてきたが、これらはすべて instructional discourse に関わるものである。そこでは学習者がその言語知識を正確に使えるかどうか最大の焦点である。他方の internal context では natural discourse が起こる。そこでは、教師と学習の役割や活動は流動的で状況に応じて決定され、ターンの分配や確保、話題の選択は参加する誰もが行うといった特徴を持つ。natural discourse において重要なのは、“the way in which each learner interacts with the material and with the other members of the group.” (Kramersch, 1985, p. 172) , すなわち言語知識・技術の習得を超えた、学習者と教師、学習者同士、あるいは学習者と学習内容の関わり合いである。

秋田 (2014) は、質の良い教育の鍵となるのは学習者が経験する居場所感と学習内容への没頭であると述べている。居場所感とは、仲間との一体感を持つことなど、学習活動を通して得られる授業中の well-being を指す。没頭とは、新たな知識や気づきを得て、それを自分たちの言葉で表現するおもしろさを学習の中に見出すことを指す。これら 2 つの要素は、まさに Kramersch が natural

discourse の核と位置付けているものであり、したがって natural discourse における学習者の活動を見つめることは、外国語教育の質を検討する際に極めて重要である。しかしながら、natural discourse のインタラクション、すなわち学習者の言語習得に直接結びつかないインタラクションはこれまで研究の対象とはなっておらず、そのようなインタラクションが学習者に何をもたらし得るかは、まだ明らかにされていない。

2. 研究実施内容

児童英語教室講師である筆者が指導してきた多くのクラスの中で「子どもの私語は必ずしも授業を妨害するものではなく、教育の質を高めるものも多くある」という気づきを筆者に与え、筆者の指導観を変容させた稀有なクラスがあった。彼らは主体的に授業に参加し「英語の場ならではの自分」を確立した。本研究ではそのクラスの子どもたちがどのように natural discourse の活動を展開し、その中で学習内容に没頭し、居場所感を獲得したのか、またそれがどのように彼らのアイデンティティ拡大へとつながったのかを明らかにするために、インタラクションの分析を行った。

参加者は児童英語教室に通う小学生 3 名である。調査にあたり、10 回分の授業と、子どもたち及び母親たちのインタビューをビデオ録画し、談話記録を作成した。natural discourse の特徴が観察された授業場面を 3 つ抜粋し、教師である筆者の視点を交えた授業展開の記述、さらに各場面に関連したインタビューに基づいて、子どもたちが特定のインタラクションに込めた意味を検討した。

分析の結果、一般的な教室談話の特徴を持つ instructional discourse が natural discourse へと発展し、子どもたちが主体的に活動を先導したり、教師と学習者がインタラクションをしながら共に活動を進めていったりする過程が明らかになった。そこでは学習を発展させる私語が許容される文化、主体性、学習内容への没頭、居場所感の 4 つ特徴が観察された。また、これら 4 つが相互に密接に結び付いていることが、インタビューの子どもたちの語りによって裏付けられた。

教育の質を高める私語が許容されることによって、子どもたちは教室の場に影響を与える有能な一員として授業に参加する。彼らは主体的に natural discourse を創り出し、その中で学習内容に没頭し、学習活動を通して居場所感を得ている。

また居場所感があるから彼らは躊躇なく自分の言葉を生み出し、主体的に学習内容に没頭できる。

この好循環の中で、子どもたちのアイデンティティは拡大した。彼らは普通の小学校での自分とは別の「英語の場ならではの自分」を持っている。彼らは、英語教室では自分を出せる、個性をアピールしたいと感じるが、小学校では決してそうではないと語る。英語教室は子どもたちの暮らしている地域にあり、クラス全員が日本人で、授業中の日本語の使用も多い。小学校と似た学習環境でありながら、しかし、教師の話をじっと聞くことが多い小学校とは異なり、子どもたち自ら natural discourse を創り出す英語教室は、ある種の異文化の場であると言える。彼らは異文化の場における natural discourse のインタラクションを通して、個性的な存在であろうとする態度、そうであることに対する誇りを持つようになった。彼らは EFL 環境下において学んでいるが、このことは第二言語学習者のアイデンティティが second language socialization を通して拡大することと同様である。これこそすなわち「人間的成長」と呼ぶべき大いなる可能性である。

3. まとめ

本研究は、教室内の一つひとつのインタラクションの積み重ねがいかにより子どもたちの英語学習をより豊かな体験へと変革させていったか、そしてそのことがいかに子どもたちの人間的成長へつながったかを明らかにした。言語知識の習得度合いを数値化して測ることは英語教育の成果を評価するのに有効な一つの方法であるが、数値化することのできない学習者の人間的成長や一般化できない個々の対話や関わりを見つめることもまた重要だ。本研究はそれを試み、言語知識の習得とは異なる次元の英語教育の意義と可能性を示した。

主要参考文献

- [1] Jackson, J. *Introducing language and intercultural communication*. Routledge, 2014.
- [2] Kramsch, C. J. *Classroom interaction and discourse options*. *Studies in second language acquisition*. 1985, 7(2), p.169-183.
- [3] 秋田喜代美. “教育の質と授業過程—居場所感と没頭という視点”. 対話が生まれる教室—居場所感と夢中を保障する授業. 教育開発研究所, 2014, p. 8-13.

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

渡邊万里子「児童英語教育における人間的成長の

軌跡—natural discourse のインタラクション分析に基づいて—」人間生活文化研究, 査読有, No.28, 2018 年. 掲載確定)